

【各パネリスト報告内容】

(道家氏)

「CBD-COP10/MOP5」

・ NGO にとってはすごく重要な国際会議であり、単にディスカッションした訳ではなく、多くのことを決めた政策決定の場でもあった。

「一日の流れ」

・ 本日の道家 (Today's 道家) というタイトルでユーストリーム (動画共有サービス) を使い、会議の様子を報告していた。

「CBD 市民ネットワーク」

・ このホームページでは、NGO の活動や発表内容を PDF でダウンロードでき、特に国際会議場内での交渉の場面については、ブログやツイッターで詳しい内容を閲覧できる。

「NGO の活動ロビーイング」

・ 3～4日間かけた作戦会議では、NGO 自身が集まってどういうメッセージを発信していくべきかを練り込み、このメッセージなどをもとに本会議場での発言、フォーラムでの発表を行った。

「CBD 戦略計画と自然保護」

・ 間接的要因としては、問題が起こる際に周りの人がその価値に気づいていない？自治体の戦略や計画に生物多様性が入っていない？謝った補助金が動いてないか？をしっかりとチェックする。これらの要因などを包括的にやっていくのが愛知目標のポイントだと思う。

・ 今後やらないといけないことは、決議の分析とこの会議を忘れないこと。行政では人事異動により知識や経験が一端切れてしまうので、NGO としては忘れない、忘れさせないを繰り返す活動が重要である。

(松岡氏)

「ブース出展内容」

・ 人権、開発教育などの違う視点から、周辺的な関わり方で、生物多様性をキーワードにした地図を作るワークショップを行った。

「ESD」

・ ESD は国連 ESD のための 10 年 (2005～2014 年) に設定されおり、持続可能な開発がキーワードになっている教育活動を推進するものである。

・ 持続不可能な、瞬間的、場当たりの開発や発展の仕方をしてきたのが我々の社会ではないか、という批判の基にもっと人間らしく 100 年先の人類にとってプラスになる社会作りを理念に作られている。

・ 環境問題も含まれるが、なによりも今生きている人たちの平和、人権、貧困なども併せて考えていかなければならない、というのは近年の生物多様性の動きとあまり変わらないと思う。

・ただ、もう一つあるのは産業開発（錢儲け、物質的な豊かさ）であり、環境や平和の問題とどう調整したらいいのか、これは矛盾と葛藤を抱える課題である。

「RCE」

・名古屋拠点は COP10 に向けて 2、3 年前から取り組んだが、本会議場内が盛り上がれば盛り上がるほどギャップを感じて冷めていた。

「生物多様性と ESD」

- ・人権などから考える以上に、生物多様性をアプローチに考えていく面白さがある。
- ・枠組みは出来ているようだが、日々悩みを持っている人々と共有できるだろうか。
- ・NGO あるいは行政の動きがもっとネットワークとして広がることを期待していて、彼らが他の団体や領域とをつなぐことによって、もっと生物多様性が普通概念になるのではと思う。

（上坂氏）

「G8 環境大臣会合関連事業（20 年度）」

- ・この会合を契機に行政・NGO があらゆる面で盛り上がっている部分があると思う。

「21 年度 環境 NGO・NPO Hyogo 対話」

- ・昨年度は特に地球温暖化と生物多様性の関係に着目して取り組んだ。

「平成 22 年度環境創造事業体系」

- ・重点事業としては、家庭からの CO2 排出削減につなげる「うちエコ診断」に取り組んでいる。

「COP10 会場での発言」

- ・サイドイベントでは、モンゴルの森林再生の支援プロジェクトということで、モンゴルから招いて色々と発表して頂いた。
- ・交流フェアでは、戸田コーディネーターに市民宣言を中心とした兵庫の取り組みをご紹介頂いた。

「行政施策の先導性（兵庫）」

- ・流れの中で阪神淡路大震災に直面した事が一つ大きなこととして言えると思う。震災によって自然と共生しなくてはならないという意識が非常に高まり、また神戸発のボランティアの活発な活動、あるいは協働の体験によってみんなで共有したことが大きいと思う。

「今後の展開へ」

- ・生物多様性を考えながら、やはり行動はそれぞれの地域に根ざし、具体的にやっていくことが必要と思う。

【ディスカッション内容】

(戸田氏)

私が行って感じるのは、兵庫県というのは、非常にそういう意味では積極的というか活発にやっているなという感じがします。というのは、ブースを見ても、例えば兵庫の県立博物館がブースを出しているのですが、他ではそういう博物館は見かけませんでしたし、もう一つ兵庫県の成果というか、コウノトリのブースの中でいろんな資料を配付したりして、兵庫県というのはよくやっているのだなと改めて思った次第です。

ディスカッションの前に、全体の方向性としては生物多様性保全という大きな枠組みっていうのが一応出来て、いろんな戦略も特に兵庫は出来上がっているのですが、具体的にどう進めるか、いわゆる継続的な取り組みに向けてというのがテーマですので、この辺の視点で少し具体的な話をしていきたいと思います。

まず今、それぞれ報告頂いたのですが、道家さんは全国の動きもご覧になっていると思いますが、いくつか兵庫県はどういう評価か、継続的な取り組みに向けてヒントになるのかな、こういう方向性がいいのではないかということについて。

(道家氏)

とても難しい課題と感じていますが。評価という形で。今回の COP10 に向けて、私も九州へ行ったり、四国へ行ったり、そういうような形で報告をしたり、地域のネットワーク作りに少し関わるようなこともやってきました。その形で思ったことを、率直に。大きく2点言いたいと思います。1点目は活動の継続性という意味ではとても素晴らしい。これはひとつ G8 という大きなイベントがきっかけにあったのかもしれませんが、2008年、2009年、そして2010年へとステップアップしていき。そして私も幸運なことに関わらせて頂きましたが、生物多様性ひょうご市民宣言というような形で、前回の2009年がかなり専門的に充実したものであれば、こちらは市民の視点で書いていく、作っていくことができたのが大きなこと。その中で、他のところであまり強調されないのは、兵庫がものすごく強調するのは次世代につなげるということ。今日の午前中のセッションでも疑問に思うぐらいみんながみんな共通している。これはすごいことじゃないかと本当に思っていることです。2つ目は、他の県とどう連携していくか。CBD 市民ネットでは、四国でいくつか、四国の多様性のネットワークができたんです、COP10 期間中に活発に活動できた訳ではないですが、今後継続していくために四国、今後兵庫がどう他県へひろがるか期待しているところです。

(戸田氏)

兵庫はそれなりに全部やっていると思いますが、兵庫県にだけとどまらずだと思います。もちろん、生き物というのは行政界に関係ありませんので。日本海から大阪湾の周辺を含めて。

もう一つご指摘がありました。「次世代につなげる」を非常に強調されているについては後ほど改めて。

中島さんも今後の課題あるいは具体的な対策にいきつくばかりでして、社会への浸透の主流化についておっしゃっていましたが、行政サイドでいくと他の部局とのつながり、信頼のことでしょうが。国民達のつかみどころがなくて、各地方自治体の市民レベルが大切なのですが、全体の方向付けについて。

(中島氏)

社会への浸透で、生物多様性をどうやって主流化していくかが大きなテーマですが。一言社会への浸透といってもいろんなレベルやセクターがある。一人一人への意識の浸透もありますし、あるいは組織、部局、行政レベルでの横のつながり、部局間の連携という話もありますし、あるいはビジネス、民間企業だとか、そういった各セクターそれぞれでの浸透。いろんな局面があるかと思いますが。それぞれで全体として総体的にやっていかなければならない。環境省として社会全体として浸透させるための底上げをやっていきたいと思っている。今年は国連の生物多様性年ということで、今年10年間、重点的に生物多様性の広報、普及啓発をやっていこうという指針になっている。それがまさに国政策ということで日本では社会の浸透ということでは大きな意味合いがあった。そういった中で、普段、環境省、行政としてできること、行政としては環境省の中でも自然環境、生物多様性の担当部局だけではなくて、まだまだ省のなかでも縦割りがあって、横の部局で何をやっているのか実はあまりよく知らない。生物全体の中でも国土交通省、農林水産省とか、まさに事業官庁のなかでも生物多様性に実際にどうやって取り組んでいけるのか。特にまた中央署、東京でデスクワークしている人だけがわかっても意味がなくて、地方の環境部局で実際に事業に携わっている人がそれを理解して少しでも考えていかないと実際には物事は変わっていかない。今まさにいろんなそれぞれの関係者がいろんなアプローチで、できることをやっていくのがポイントで、みんなで取り組んでいくことが重要。環境省ではその旗振り役はできるかなと思ひまして。「地球いきもの委員会」を立ち上げたり、「いきもの応援団」、「さかなくん」、アナウンサー、「養老孟司（ようろうたけし）」など、有名人を使って普及啓発、イベントに出て頂いたり。そういった旗振り役はやったり、あるいはガイドラインを作ったり、みんなに情報共有していくことはできる。それを実際に本当にやっていくのはそれぞれの自治体の職員であったり、NGOの一人一人の取り組みであったり、あるいは本当に一人一人の個人の意識であったり、教育の中で子供達にどう伝えていくか、生物多様性をどう伝えていくか、というお父さんお母さんの意識であったり、いろんな側面があると思います。そういったものをいかにみんな協力しながら、バラバラではなくて取り組めるか、今回のCOP10をきっかけにぜひみんな考えていければいいのではないかと。

(戸田氏)

環境省の立場としては、旗振りが大事。ただ旗振っても後ろから誰もついてこなければ意味がない。メディアっていうのは大きなもの。我々市民レベルでは、この会議終わるまではいろんなメディアで生物多様性を耳にしたのですが、ガラッと変わって違う画像ばかり見えています。フロアの方からご意見あれば頂きたいのですが。基本的な方向は出たのですが、これを我々の生活レベルにどう落とし込んでいくのか、それから経済的な話が出てきましたけど、それとどうリンクしていくのか。

(参加者A)

持続可能な発展とか、持続可能な多様性の保全とか、たびたび出てきましたが。持続可能というのが、何年先まで3年か、5年か、10年か、100年か。2、3の方が100年先とか200年先とかという言葉が出されましたけど。100年先、200年先に地球の人口がどうなっているのかを想定されているのか。今現在60数億ですが、年々8千万～1億人ずつ増えている。そういう状況にあって、100億超えるのは30、40年後确实だと思ふ。今の人口の1.5倍になったときに生物多様性の維持ができるのか。いろんなエネルギー、食糧、水、いろんな資源の問題を考えたら難しいのでは。

(戸田氏)

ご質問のようですが、なかなかこれは、ここにいるパネラーには的確に答えるには難しい。答えというよりむしろ自分の意見しか出てこないと思いますが。実はそれについて科学的なちゃんとした見通しをやっているのか。もし情報があれば。

(道家氏)

おそらく、人口増加に対してやっていけるのか。やっていくために何とかしないとイケない。すくなくとも30歳の私としては、そう答えるしかない。そのために生物多様性条約がありますし、生物多様性条約の核となるメッセージは多様性を保持してより豊かなものに、今みたいに無視していく形ではなくて、豊かにしていく形でないとやっていけませんよだと思ふ。2020年までの戦略計画には生物多様性の損失を止めるために、あらゆる行動をとらましようとして書かれてもいるが、次の文章にはそれが貧困撲滅とか生態系の安定性などに叶っていくからと書かれている。そういうのを検討するために、中島さんの抱負にありました多様性を無視するのではなくて、市場の価値ではなかったらどうなるのか、市場の価値でははかれないけれど経済的にどういうふうにはかれるのか。それを共有していこうという動きもある。個人的な意見ですが。

(中島氏)

世界でも人口増加を念頭において今回の戦略計画が考えられたかという微妙なところが

ある。持続可能なといったときには、望むならば永久に。そもそも人類、地球が完全に持続する訳ではないことは、それなりにわかっている。その中である程度人間が考えられるプランのなかでどれぐらいの時期を設定するかが一つあると思う。日本の場合でいえば、先ほど国家戦略の中では、100年が長期的な時期の範囲として、ある程度人間が想像できる範囲ってどれぐらいだろうが一つ。100年先までは3世代先なのである程度イメージできるだろう。というところで100年が一つの考え方としてあるであろう。今の国家戦略を作った際には、日本の場合でいえばちょうど頭打ちになっている現状がある。過去100年間、日本の人口も経済も増加していき生物多様性が失われてきた。それが過去の100年間であった。日本の人口はこれから減少していくことになる。そういった中で今後の100年間は回復の100年間であると今の国家戦略で明確にシナリオとして位置づけた。その中で、100年後のブランドデザインを考えながら、人口が減少していくなかで、日本の自然環境をどう考えていくかが国家戦略の中に含まれている。その中でさらに今後50年間のイメージ、10年間の行動計画というような形で国家戦略の中に政策のプランも含まれている。一方で、国によってそういった状況、人口なり、資源利用の状況が全く違い、途上国ではまだまだ人口増加が進んで、資源の利用がまだまだ足りない、そういった状況でどうやって持続可能を確保するのか。愛知目標の議論の中でも、そこを総合的にまとめて議論した訳ではないが、それに類する発言が結構あった。2020年までに生物多様性の損失を止められるかの議論の中でも、特に途上国の中では、人口増加してきて森林もどんどん減少し、資源利用も増えざるを得ない。そういう状況の中でそんなに簡単に生物多様性の損失を止めることは現実的には無理だという発言は結構強くあった。そういった中で、野心的でもあり、かつこういった人口増加もみながら、現実的にみんながどこまでできるのだろうかというようなバランスをとる中で、妥協された愛知目標が出来上がった。ご指摘の点は、環境問題の本質的な部分で、すぐにいい答えが得られるものではないと思うが、COP10の中では、あるいは国家戦略の中ではそういった記録とか話がありましたのでご参考までに。

(戸田氏)

今の問題提起に答えるのは難しいと思うが。このことについては最善を尽くしていくしかない。

(松岡氏)

今のご質問は、持続可能な開発のための教育、すなわちESDのワークショップでよく出てくる問です。基本的に限られた資源と限られたパイの中で何ができるのかだけではなくて、人間自体がこれからどんどん人口増えていって活動が活発になっていく、あるいは南北問題の中で南が期待しているライフスタイルは何か、期待する、しないに関わらず都市化がどんどん進行していく、経済的にも発展もしてくる。そういった中で生物多様性というえ

づらごとは北の人たちが言っているだけじゃないか。もっといえば、やや刺激的に言いますが、神戸市内を考えてみますと、都市部で生物多様性ってせいぜいビオトープをつくるぐらいですか、公園つくるぐらいですか、隣を車がガンガン走っていて。結局、少し北の方に行って、里地里山をつくっていく。これをむなしく思う人もいるかもしれません。僕は人間の営みとして価値があると思っているが。人口がこれから増えてくる、経済が発展してくる、それとこの自然環境、地球環境の保護をどうするかという課題、これを専門家に委ねる発想の仕方をしてしていると、結局ずっと時間が過ぎていくだけです。国家戦略あるいは国際的な戦略、これどうなるんだって圧倒されそうな気がしますよね。今日もこれだけ説明があれば。だれかどっかでやってくれるのだろうと。環境省が旗振りして誰もついてこないという、環境省が全部やってくれると思う危険性がある。実際にESDも環境省が先に旗振り出したので、文科省、厚生労働省もついてこなかった。ご存じだと思いますが、非常に困った状況です。旗を振ってきている国家戦略なり国際戦略とは別に、我々のコミュニティー戦略または個人戦略をつくっていかないといけない。その個人戦略が、例えば地域の経済、あるいは町づくりにどこまで影響を与えられるか。そうすることによって初めて生物多様性を潰してきたところの経済システムや社会的な活動を変えていくことができるのではと、そこにロマンがあるとみている。それからビジョンがあって、人工統制しないさい。そこまで悪いことを言う人はいないと思うが。そんなことを上からシステムとしてやられたらたまったもんじゃない。そこには確実に反人権的な行為が生まれてしまいます。いわゆる人権の問題と社会づくりと環境とさらに経済といった、ベクトルの違うものを我々どう解決していくのか。これを考えていく上で例えば道家さんがやってくれたワークショップは非常に効果的である。いろんな人たちが違う意見をガチャガチャ言いながら、妥協点ではないかもしれない。共通点あるいは違う点を見出しながら、いったいどういう人たちと仲間になれるのか、どういう人たちとネットワークが組めるのか、どのネットワークの人たちとは利害が対立するのか、こういったことを明確に意識していくなかで初めて課題とか矛盾点を解決できるのではと思っています。

(戸田氏)

非常に重要な指摘をして頂いています。私も思うのですが、最後は個人のレベルで、個人の生き方の問題ですね。もっといえば個人の安全保障。あるいは家族といってもいい。各ご家族3世代どう生き延びるか。ご年配の方もおられますが、まだまだこれからご活躍、あるいは家族をとという方もおられますが。果たして100年、自分の家族が生き延びられるか。そういうことも含めて、日常の活動の中で生物多様性の保全に結びつく、逆に生物多様性に悪影響を与えるような、これについての具体的な話に。例えば、温暖化防止なんかですと数値目標が具体的に出て、例えば環境家計簿みたいに、日常の中でこれは節約しましょうとか、これについては効率のいいものを使いましょうとか、具体的な提案が出ていますが。生物多様性については値の指標とか、具体的な活動についてありますか。アイデ

アでもいいし、実際にやられているようなもの。

(中島氏)

生物多様性の場合なかなか直接的に一人一人の活動を、ゴミとかエネルギーとか温暖化での取り組みとはやや違って、何をやるかわかりにくいところがある。これまでの環境省でも、マイ行動リストを一人一人で作ってもらって、自分たちに何ができるのだろうかということを考えて、「マイ行動宣言」をいろんな方に書いてもらった。あるいはマイ行動のいろんな事例をウェブなどに掲載したりしています。一つ一つの行動は単純な話で、例えばペットを飼ったときに、それを飽きたからペットを野外に離してしまう。そういった行為そのものが外来生物の悪影響につながるとか、オオクチバスが拡がってしまうとか、カミツキガメが拡がってしまうとか。そういった生態系への影響にもつながってしまう。一人一人のペットは責任もって飼いましょう、ということや、あるいは生物多様性の重要性を認識して、それを感じるために例えば地産地消をどんどんやってはどうでしょうと投げかけていたり。身近な自然に一人一人がふれるように、近くの自然を立ち止まって観察してみましよう。それが一つ一つの生物多様性の意識が、社会を変えることにつながっていくという話をしたり、そういう一つ一つの日常的な行動のリストをつくって、みんな呼び掛ける取り組みはやっている。

(道家氏)

それよりも言いたいのは、先ほどの戸田先生のまとめに反対でして、最後は個人ではないと私は思っています。というのは午前中のセッションで、ため池にヘラブナを離される話がありましたが、確かにこれは意識していないかもしれないけど釣りをしている方の個人、それやめて下さいと個人個人に思うが、個人個人に期待しても絶対に通用しなくて。例えば釣具屋さんにチラシでも貼って下さいと、全国釣り連盟とかそういうところをお願いしますとか。(適当な団体名ですが。) 里山の伐採が進みます、砂浜の埋め立てが進みます、個人がどうのというよりかは、多様性のことを考えるための補助金がまだあるということだと思います。ですので個人活動することはとても大事です、だけど個人で解決できない問題がたくさんある。私のプレゼンのところで最後の2番目のパワーポイントですが、誰も知らないというのは、確かに問題です。でも、それだけでなく補助金の問題も当然あるし、そこにどれだけの人が関われるか、私たちの意志の問題だと思う。環境に関して、環境で働く NGO なんて全然給料も低いですし、人も少ないですし、そういう在り方をどう変えていくとか、総合的に考えていかないと結局失敗すると思う。全体の流れを無視するかもしれないですが、絶対個人ではない。個人だけでは解決できないことをもっと多角的にやっていきたい。

(松岡氏)

最後は個人ですねと言われたのは、僕はたぶん個人の自発性とか、その人がどんな生き方をするのかを抜きにして、システムはないだろうという趣旨だと思う。言うまでもなく個人の行動、意欲あるいは主体性と、それからシステムまたは集団の動きと連動してやらないといけないので、どっかが先はないはず。例えば教育という理念で、COP10の先を考えたときに、我々日本の教育は個人に入りすぎているところがある。個人の意識、行為が変わるといふこと、これが何年かしたら予定調和的に集団に変化につながって、社会が変わっていくんだ、というように。極端な話をすると、環境省のエリートを育成していればなんとかなる。そんな考え方、キーパーソンを育成していればなんとかなるといふ考え方ともしかしたら同じかもしれない。どうやら教育という営みは、教える側と教えられる側が何かあるものでは必ずしもなくて、お互いに関係を作り上げていくことそのものにもう変化の兆しがある。教育の営みはもしかしたら全体が変わっていかうとする時の営みかもしれない。その際、個人の意識や行為を無視し始めたら、非常に危険性がある。そういったところは、これまでの近代教育が教えてくれている部分でしょうけども。いわゆる COP10の生物多様性、環境保全、持続可能な開発といった問題について考える時の教育は、どうやらこれまでの教育とはちょっと違う。そんな違いは一体何なのかということ、NGOなり NPO なりが理解しながら、もちろん行政も学校も理解しながら、全体的に総合的に進めていかないといけない。道家さんがおっしゃる通りだと思います。

(戸田氏)

教育ということが出ましたが、午前中の活動されている団体のリレー発表の中でも、子供達と一緒にとか、子供達につなげていくが強調されていました。それから、さっき道家さんがおっしゃったように、ひょうご市民宣言を作るときにも教育についてたくさんのご意見がありましたが、この辺についてフロアの方からご提案頂きたいのですが。教育で、次世代にどうつなげるか。

(参加者B)

名前はしげもとです。私は今現在いろんな活動に携わってまして、一つは森林ボランティア、ジューンネットワークの組織にいます。それから農業関係で食糧自給率の改善の問題、米作り、地産地消の運動とか、タネを守る活動とか。さらに兵庫県の創生塾とか、地域活動にも参加しています。さらに震災のボランティア語り部をやっています。先ほど道家さんが兵庫県はえらく伝承とか継承とかいう言葉が、まさに私はいろんな活動をやっていて、ある意味で兵庫県民は15年前に大変な災害があつてそのことを通してボランティア活動の必要性が肌身に感じているはず。その活動が15年してきたら、それなりに風化して体力的にも衰えてきていることを何とか伝えたい思いが強くなってきている。実は最近、まちづくり協議会を立ち上げて、昨日も会合に行つたのですが。やはり若い子供さんの時からそういう場に我々がある意味まち全体の作っていく中で子供さんも入れていく、

そういう環境を作る、これは大人としての責任。青年を育てて、さらにその子供を育てる、まさに3世代つながっていくような。生物多様性の世界は、当然、森林ボランティアの活動にもあるし、農業の関係にもあるし、まちづくりにもある。ヒューマンネットワーク、人と人とのつながり、先ほど個人とか組織とかありましたが、今この時代はボランティアな活動家がどれだけ増えていくか、そういうことを行政、企業の人も含めて、そういうところが総合的に立体的に組み立てをし直す時期がきているのではと感じている。個人的な体験を通してですが。当たらずと言えども遠からずではないかと思う。

(戸田氏)

非常に貴重なというか大切なご意見を頂きました。

(参加者C)

神戸市環境局の西谷です。市民の立場で言わせて頂きます。教育というとぜひ中島さんをお願いしたいのですが、環境教育推進法が数年前に出来て、環境教育を総合的に推進していくという立派な法律が日本にあって、今、生物多様性にスポットがあたると、ついつい生物多様性、生物多様性となって、どうしても生物多様性の戦略とかその教育について委ねがちですが、一番はその大元に戻って、立派な環境教育推進法に基づくその仕組みとか、環境教育推進法の理念の中からESDが出てきたり、総合的につないで、人と活動をつないでいく、という訳ですから、もちろん地方でもそういうことを考えて、こういう会もあるし、温暖化対策とか、循環型社会作りとか、そういう面でやろうとしています。ぜひ国レベルでも、COP10の結果を環境教育推進法に上手く活かして展開していけばいいのではないかと。ご検討頂ければと思います。

(戸田氏)

今のは、中島さんへの要望ですが、またご検討お願いします。

(参加者D)

コープこうべ江見と申します。午前中に発表させて頂きました。私ども生物多様性というキーワードが出てきたときに、これは市民にとってどういう風にアプローチしたら分かってもらえるのだろうと考えたのです。やはり、ぱっと見、難しい言葉です。ほとんどの方がその中身はどうかわからんと、ただCOP10があることは知っている。本当の意味は、自分たちの暮らしの中にたくさん命があって、その命を大事にしないと、これから未来に続いていきませんよ。命が脅かされているんじゃないですか、という問題提議であると私は捉えている。その中の一つで、生物多様性の中に生態系サービスがありますが、私たちみんな命を食べて生きていることにもう一度気づかないと、ほんとに食べ物というのはいかに危機な状態であるかとういようなところに引きつけていくと、すぐ目の前にある食べ物、

日本では全然問題ない、でも海外ではどんどんなくなっていて、水資源もそうですし、資源そのものもそうですが。そのあたりが一番目の付け所として、その辺り、生物多様性の言葉の中に含まれる身近な視点としてどのように考えていくのが妥当といたしますか。これから国際化していく中で日本がとるべき資源という部分の捉え方についてご意見頂ければと思います。

(戸田氏)

非常に大事に視点だと思います。時間が押してきているので、先にご意見伺いたいと思います。

(参加者E)

アースパル神戸という NGO で活動しております、宮本と申します。先ほどの教育論の話もございましたが、午前中の話の中での大人と子供の自然観、自然に対する、自然て何だ、という感覚が違うだろうと、そのギャップを埋めたい、そこが今の日本の中で、戦後だけ考えても、ずいぶんギャップが出てきているだろう。それは自然環境がやはり変わったから。私たちが、例えば子供時代に山へ行った感じ方と、今子供たちが山へ行った感じ方に違う部分があるだろうと思う。その自然観を教えることを国レベルで考えていく必要があるだろうと思うので、その辺のご意見頂きたい。二つ目は、COP10を少し垣間見たのですが、やはり南北の戦いといいたいまいしょうか。南の人は、今回の条項にはのめないけど、条約はなんとかまとめたいと、かなり必至な考え方、みな国を代表して来ておられるのですから、そういう風にご意見されて最後は何とかまとまった訳ですが。その条項それぞれに違いを思いながらも、そうやって妥協を見出す必至の状況を、日本人も知るべきだと思う。それを国が上げて国民にちゃんと教えていってほしい。それは我々個人ももちろんすべきだと思う。道家さんも始め、先ほど目標が20ありましたが、その今後のロードマップと戦略をどういう風につくって、具体的にどこまで落として、どう我々の市民レベルに落としてくるか、環境省も国土交通省も経済産業省もみんなで考えるべきだと思う。そこを何かしらヒントでお答え願えればと思う。日本が例えば20億ドル出すよと、お金があれば今回の2010年の目標達成できたかもしれないという意見があった訳ですが、なんしかお金がないとダメだという世界ができている訳です。これは日本がどう答えるべきか。

(戸田氏)

今、二人の方から、少し思い質問がありました。時間が押してきているのですが、お答えできればご意見頂きたいと思います。

(中島氏)

先ほど自然観の話がありましたけど、大人と子供のギャップを埋めていくとか。ご指摘の点もわかるのですが、最後は国レベルでやっていくことがそもそも良いのかというのが、若干どうかと思ひまして。やはり自然観というのは、当然世代間によって違ってある意味当然のところもあって、その時々によって自然環境の状況も全く数十年経って国土の状況も違う訳ですし、人によって違うし、世代のギャップがあるのもある意味自然なところがあると思う。そういった中で、ただ本質的な部分、本質的に生物多様性を守っていくことの重要性を、どうやって自然と共生していくかというポイントは、いかに自然観が違ってても、伝えていくべき本質的なポイントはやはり同じというか、あると思う。そういった辺りを、世代間のギャップを、逆に語り合う中で、一番大切なもの、本質的なものは何なのか、人間と自然とのお付き合いの中で、一番考えていくべきものは何かのポイントをいかに伝えていく、共有していくか、とういうところが重要だと思う。それはあまり国レベルでどうこうしようという話よりも、まさに日常の生活の中でできることがたくさんあるのではないかと感じました。

あと最後にお話にありましたが、こういった交渉で、名古屋議定書ができて、交渉の末に、今回採択されたというところで。途上国からとにかくお金お金という話があって、まさにお金があれば本当はいろんなことができて、生物多様性を保全できるのにというのがあります。その為に途上国支援、今後日本は2年間議長国として役割を担うことになるので、やはり期待されている部分があるので、やはり途上国支援のですね、お金というかそういった取り組み、ODAを充実させていくとか、あるいは国際機関に拠出をしてその中から途上国支援を進めていく、そういった国際支援の方策というのも色々と考えている。いずれにしても、お金がなければ物事が進まないところがありますが、どう限られたお金をどうやって効率的に使って、効果的に世界の生物多様性を守っていくか、途上国みんなで考えていかなければならない。それぞれができることをやっていくということですね。とにかく、この交渉の中で、このCOP10で、交渉が何とか合意に辿り着いたのは、とにかく今、議定書を作って物事をスタートさせないと、とにかくすぐに行動を起こさないと、ダメなんじゃないかと、交渉をズルズルやって各国が主張ばかりしていても物事が進まないという、そういった危機感の現れだったのではないかと思います。そこの共通意識がCOP10で共有されたのかなと思ひました。

また、今後どうやって戦略計画を各国、そしてそれぞれの活動に落とししていくのか、ロードマップという話もありましたが、これまさに今後の宿題として今後やっていきたいと思ひます。

(道家氏)

新戦略計画20の目標があって、それをどう実現させるか、ロードマップの話で、ヒントでもということなので、可能な限りがんばりたいと思ひます。私が事務局を努めるIUCN日本委員会でも今度の愛知目標をどう国内で実現させるかのワークショップを開こうと考

えている。一回で全てが決まる、決められる、全て良いものができるとは思っていないが、積み重ねていきたいと思っている。いずれにせよ、ワークショップをやるまでもなく、わかりきっていることは、自然保護団体だけでは絶対達成できないということです。だから私たちは、ESD もそうですが、いろんな団体と一緒にやっていかなければならないということはわかりきっている。CBD 市民ネットで私は事務局的な活動をやらせて頂いて、感想としてはとても大変だった。そして面白い情報なのですが、COP10 期間中に CBD 市民ネット今後どうしましょうか、複数回答ありということでいくつか選択肢があって手を挙げてもらったのですが、さっぱり解散させましょうと手を挙げたのが5人ぐらいいたのですが、全員事務局側でした。何を言いたいかという、NGO が変わっていかなきゃならない、私自身も大きく変わっていく、これからも変わっていかないといけない。異分野の期待がそれぞれ違う、目標を持っている人と一緒に仕事をするの大変さ。自分が変わらないといけないし、でも譲ってはいけないものもある。この葛藤の中で、互いにフラストレーションためながらも、でも仕事をしていく。そういう環境をつくっていく。少なくともこれまでの仕事と全く違うタフな仕事になっていこう。COP10 準備以上にタフな仕事。次のロードマップを考えていくのは当然なのですが、そのために自分たちがどう変わらなといけないのかを併せて考えていくことがとても重要だろうと思う。ヒントかはわからないですが。

(戸田氏)

道家さんからの率直な感想ですね。これを乗り越えていかないと、次への広がりを実現できない。その時、どちらかという今までは生き物好きが仲間でやっていたら済んだ話かもしれないが、これからはもう一皮剥けていくと、視点をいろいろと持たないといけない、お互い変わっていかないとけない。松岡先生のESDはいろんなところを取り込むというか、みんなでやらないといけない。その辺の秘訣というか、どういう視点をもったらいいのか。

(松岡氏)

道家さんって素敵な人だなんて思って感心していました。つつい周りに向かって、こう変えていくべきだとか、こうすべきだと言うところで、まず自分自身が振り返って自分の在り方を問う姿勢があるというのは素敵だなと、道家さんだったら一緒にネットワーク組みたいと思いました。ESD っていうのは次世代につなぐとかつつけて言うならば、エデュケーションフォーオール、ワンフォーオールとかよく言いますね。というもう一つ別の宣言と一体化しているのです。全ての人にとっての教育とつながってきます。子供たちだけが学ぶだけでなく、もしかしたら自分自身がもう一度自然界を見直さないといけなかったり。なにしろ近代化の100年間ぐらいの間に絶滅種がものすごく増えた訳ですね。それ作った100年間は誰ですか。ということを見るとノスタルジックな自然界を持つ

ているだけでは、生物多様性だとか環境保護ができる訳ない。申し訳ないですが、こどもたちに感動をとおっしゃった方がいました。大事なことだとは思いますが。ただその感動が自然が美しいとか、虫はこんなだとかの程度のものであったとしたら。最後の最後にぶっちゃけますが。だとしたら、大きな発展とか経済の成長とか文明の魔力に果たして打ち勝てるのか。そうすると、そういうことを批判的に検討して考えることができるのは、実は大人たち、我々なんです。我々が自分たちの生き方とか、自然観とか、人間と自然の在り方とか、一番批判的に考えることができる。その批判的に考える中で、そこに青年たちや子供たちやいろんな人たちが交わりあってくるような、まさに異質の人たちが集団的に考えることがESDの最も大きな大切なポイントなんです。ですから、今ここにいる人たちもかなり異質な人たちが集まっていると思います。里山辺りにいっても、神戸がやってる里山地域、国土交通省が管轄の公園でやっているのですが。そこでいろんな団体が集まります。障害のある方を支援する団体も、里山作りをやっていたり、あるいは環境学習、子供たちがやりたいことを実現するための団体とか。そういう団体が集まって協議会を経ながら、いろんなことを考えています。ここはもう矛盾だらけでなかなか進みません。矛盾がかなりあってどうやって公園をつくっていかうか。エネルギーが相当いるみたいですが。でもそのエネルギーをかけているところに大きな学びがある。神戸大の学生たちがそこにお邪魔して、一緒にボランティア活動させてもらっています。彼らは色んなことを学んでいる。評論家的に学ぶのではなくて、自分がいつかこういう矛盾とか、問題にふれてきて、どういう関わり方すればいいのかを考えていくんです。ESDというのとは一番フィールドを大事にするというか、フィールドっていうのは矛盾がある。例えば道家さんのカバン持ちさせて頂いたら、非常に勉強になると思いますし、もっと国レベルにお願いしたいのは、国民に対する啓蒙、啓発はいいから、国土交通省とか、文部科学省とか、総務省とかに対してアピールをしっかりしてほしいと逆に思ったりしますが、そんなこと言えません。おそらくそんな矛盾の中でやってらっしゃるのでしょうが。そういうものを肌身で感じることだと思うんですね。僕は今日、二人にお会いしたり、ひょうご環境創造協会の人、戸田さんとか皆さんにお会いして嬉しかったです。もうちょっと矛盾をこれから聞ける、感じられると思うからです。ここにいるたくさんの人たちは、それぞれに苦しんでいると思います。それをお互いに共有したり、共鳴したりする場面に、他の世代の人や、違う団体の人たちや、違う問題意識をもっている人たちに来てもらって、一緒に対話をしていくことができれば、たぶんそこには新しいタイプの環境教育、そしてESDがあるのではないかと思っています。

兵庫県が他の県とどういう関連を持つかですが。実は生物多様性の問題は、南北問題とおっしゃったように国際的なつながりの中で動きます。兵庫県は国際交流という点がすごいんです。こんなこと僕が言っているんですかね。国際交流という点でも大きなネットワークを持っていて、まさにアジア、アフリカの国々とその人たちと交流することも今やれなくはないと思う。ネットワークを広げながら、生物多様性という問題をリアルに感じてもら

うようなプログラムを、僕らがどれだけ考えて実践できるのか。そのためには行政もそうですが大学も一枚噛ませてもらえたらありがたいと思います。地域にいろんな大学ありますよね。あるいは研究所もあります。一番一緒になってやってほしいのが、企業の人たちです。企業の担当の人たちではありません。企業の統合されている方、トップの人たち。この人たちと一緒に、そういったジワジワした活動することが大切だと思います。ちなみに、お金がないからお金をくれと途上国が言った訳ではありませんよね。お金があれば生物多様性を保全できると言っている訳ではないですよ。北の国々に対する決定的な不信感です。ほっといたら金を搾取して北ばかり豊かになっていくんじゃないか。ふと気がつけば南の方は資源を全部とられて、環境も破壊され、貧乏人がいっぱいいる。これは歴史的につくられてきたことですね。だから不信感があるのは当たり前ですよ。だから一般のアメリカの企業、日本の企業が遺伝資源とか、生物資源とかを使ってどうのこうのって時に国単位で歯止めをかけてくれよと言いたくなる訳ですよ。もし我々を信用してくれていれば、そんなことなるはずないですよ。いち製薬会社の人がちゃんとした契約を結んで、きちんと利益を還元しますよと言って、それを守るのであれば文句言わないですよ。日本の企業はけっこうひどいやってますよ。アジアに行って、アフリカに行って、企業関係の方いらっしゃるかも知れませんが、そういうところの積み重ねなんですよ。僕は今バングラディッシュ大好きで、行っているのですが、そこに繊維関係の会社が日本からいっぱい入っています。労務関係もけっこうひどいことやっています。中国もそうだったんじゃないでしょうか。もしかしたら。もしかすると生物多様性の条約でなんとかまとまったが、あれだけ問題が起きたのは、実は歴史的経緯もある。そのことも同時に考えないといけないと思う。

(戸田氏)

だんだん議論が盛り上がってきたところですが、時間も過ぎてしまって、午前中から引き続きの方もおられるので、これで閉めたいと思います。何かまとめてくれということですが、どうもまとめるような話がないですね。今、松岡先生がおっしゃったことで私は閉じたいと思います。我々の豊かな生活、豊かといってもいろんなレベルありますが、最小限飢えない生活っていうのは、他の国の人たちのある意味犠牲で成り立っている可能性もある。だから、それにまで思いを馳せることも含めて、生物多様性について我々ももっと理解を深めていきたいと思いました。

最後に上坂の方で、今後兵庫県の方で具体的にどういう風にこれを市民活動とつなげていくか、そういう兵庫戦略、市民宣言がどういう風に具体化されるか、何か方向性があれば。

(上坂氏)

午前中のご発表から今のディスカッションにかけて有益なご意見を頂きまして、ありがとうございます。私どもは県イコールではなくて、県の外郭団体で、やはり県民、事業者、

NPO 団体、みなさんの中間支援機関として、これから頂いた意見を参考に来年度以降の事業を企画していく訳ですが。やはり兵庫県の戦略、神戸市さんも今戦略をお作りになっていて、全国の政令指定都市の中でいうと2番目、名古屋に継いで策定ということで、色々と進めてきておりますので。今日私どもがほんとに思ったのは、2つのキーワードとしてまとめます。私ども協会としてやっていけないといけないキーワードということでは、1つ目は「つなぐ」、2つ目は「進める」、この2つのキーワードを頂戴したかなと思っておりまして、それを私ども大きな眼目として、やはり生物多様性兵庫戦略、神戸戦略、それから皆さん方で汗をかいてお作り頂いた市民宣言、そういったものをベースに、どのように進めていくかという辺りを、先ほどの絵柄にも示しておりますが、専門家の先生方とか、専門機関、そういったところのバックアップも頂きながら、いろんな事業を展開していけたらと考えています。

(戸田氏)

これで終わりたいと思います。今日ご参加の皆さんも、これから益々のつながりを意識しながら、それぞれのご活動を進めて頂ければと思います。私自身もいろんなところに首を突っ込んでいますが、これからも今日頂いたご意見を参考に活動を進めて行きたいと思えます。